

「原因」動詞結合に関する日韓対照研究*

李忠奎**
ch4229@hanmail.net

<目次>

- | | |
|------------|-------------------------|
| 1. はじめに | 4. 日韓語の「原因」動詞結合 |
| 2. 先行研究 | 5. 対照言語学の観点から見た「原因」動詞結合 |
| 3. 考察対象と内容 | 6. まとめと今後の課題 |

主題語: 原因(Cause)、手段(Means)、動詞結合(Verb Combination)、複合動詞(Compound Verb)、動詞句(Verb Phrase)、一義的経路の制約(Unique Path Constraint)

1. はじめに

日本語の「凍える、死ぬ」という2つの動詞を用いて作り得る動詞結合としては、以下のようものが挙げられる。

- (1) a. ひよこが凍え死んだ。(横山2016 : 131、下線引用者、以下同様)
b. 酷寒が原因で多くの人が凍えて死んだ。(崔2019 : 11)

すなわち、(1a)のような介在要素無しタイプ「凍え死ぬ」と、(1b)のような介在要素有りタイプ「凍えて死ぬ」が作れる¹⁾。両方とも前項動詞(V1)と後項動詞(V2)の間に「V1の結果、V2」という意味関係が成立し、V1がV2の「原因」を表すものと分析することができる(影山1999、2013)。

それでは、「落ちる、死ぬ」を用いてはどうであろうか。この場合は介在要素無しタイプの「*落ち死ぬ」は容認されず(影山1999、何2010)²⁾、介在要素有りタイプの「落ちて死ぬ」し

* This work was supported by the Ministry of Education of the Republic of Korea and the National Research Foundation of Korea (NRF-2019S1A5A2A01040613)

** 西原大学校 ヒューマニティ教養学部 助教授

1) 両言語の動詞結合のタイプとその下位分類については、2.1で解説する。

2) 「*落ち死ぬ」は、野村・石井(1987)の『複合動詞資料集』と国立国語研究所の「複合動詞レキシコン」

か作れない。

- (2) a. *(崖から)落ち死ぬ (影山1999 : 206)
- b. *太郎が崖から落ち死んだ。(何2010 : 146)
- c. その直後、ヒモは陸橋から落ちて死んだ。(いつか)

両方とも「V1の結果、V2」の意味関係を認めることができるが、なぜ「*落ち死ぬ」は日本語として容認されないのか。

一方、「凍える、死ぬ」に対応する韓国語の「얼다, 죽다」を用いて、(1)と対照できる形で動詞結合を作ると、成立するのは介在要素有りタイプの「얼어 죽다」のみとなる。なぜ、介在要素無しタイプの「*얼죽다」は成立しないのか。

- (3) a. *병아리가 얼죽었다.
- b. 흑한이 원인으로 많은 사람이 얼어 죽었다.

「*얼죽다」のような介在要素無しタイプの形態が成立しない点については、研究目的上、(2)の直訳形として挙げた以下の文からも確認することができる。

- (4) a. *(벼랑에서) 떨어지죽다.
- b. *타로가 벼랑에서 떨어지죽었다.
- c. 그 직후에 히모는 육교에서 떨어져 죽었다.

結果的にその成立可否は(2)の場合と同様になるが、では、(4a)の「*떨어지죽다」が成立しない理由も(2a)の「*落ち死ぬ」が容認されない理由と同じなのか。

両言語は動詞結合が豊富であり、その実例が多い分、様々な観点からの対照分析が可能である。そして、上記の疑問は両言語の動詞結合の全体像を把握していく上で、検討を要する課題と考える。

そこで本稿では、V1がV2の「原因」を表す実例を対象にして、上記の疑問を含む諸問題について検討する(詳細は3.2に記述)。なお、本稿で取り扱う問題の一部についてはすでに李(2012)でV1が「手段」の例を対象にして検討したが、本稿ではその「手段」の例との関連も念

(<https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon>)にも収録されておらず、同研究所の「少納言」(<https://shonagon.ninjal.ac.jp>)からもその用例が検索されない。

頭に入れた上で、主に「原因」の例に焦点を当てて考察する³⁾。

2. 先行研究

具体的な分析に先立ち、本節では、1)日韓語の動詞結合、2)V1とV2の意味関係、3)「原因」の具体例について概括的に触れておく。

2.1 日韓語の動詞結合

日韓両言語の動詞結合は、形態論的観点から{-て/-で}{-아/-어/-여}{-고}{-아다/-어다}という介在要素の有無によって、「押し倒す, 오르내리다」のような介在要素無しタイプと「歩いて行く, 걸어 가다」のような介在要素有りタイプに二分することができる(李2021)⁴⁾。また、各タイプ内において副詞類による境界部の分離可能性や意味の特殊化などの諸特徴を根拠にして(金倉燮1981、金鎰炳2000、이익섭・채완2001、和田2011など)、大まかに「打って出る、食べきる、알아보다, 주고받다, 넘어다보다, 여닫다」のような複合動詞、「食べてみる、開けておく、먹어 보다, 열어 두다」のような補助動詞結合、「(店に本を)持って行く、(가게에 책을)들고 가다」のような動詞句⁵⁾に三分することができる(정원수1992、李2009、2010)。ただし、韓国語では「꺾주리다, 여닫다, 오가다, 오르내리다」のような少数の介在要素無しタイプの例を除いては(金永錫・李相億2006、한길2006)、複合動詞であれ、補助動詞結合であれ、動詞句であれ、いずれも介在要素有りタイプとして具現される。塚本(2004、2009、2013)などとは対照的に⁶⁾、本稿ではV1に動詞「語幹」という概念を適用し、日本語の子音語幹動詞がV1に立つ場合のみ子音語幹直後に「i」母音を付加する(例：押し倒す→os・i・taosu / 押して倒す→os・i・te・taosu)、と分析しているところにその特徴がある。

3) 本稿は李(2012)の後続研究として行うものであり、議論を進めていく過程で内容的に李(2012)と一部重複するところがあることをあらかじめ断っておく。

4) 本稿では「見ながら食べる, 보면서 먹다」のような{-ながら, -면서}などが介在する例は動詞結合から除外する。これについては李(2021)で言及しているので、参照されたい。

5) 本稿における動詞句とは形態的に2語と考えられるもので、1語の複合動詞と対立をなす用語である。

6) 同氏は「泣き叫ぶ, 돌아다니다」におけるV1「泣き-, 돌아-」を「連用形」という用語で分析している。

2.2 V1とV2の意味関係

影山(2013 : 6-7)は、影山(1993、1999)、Matsumoto(1996)、松本(1998)、由本(2005)などの分析を踏まえた上で、日本語の語彙的複合動詞に見られるV1とV2の意味関係を以下のように分類している。ちなみに、(5f)は、影山(1999)が挙げている(5a-e)の分類に同氏自身が新しく追加したものである(具体例の示し方に引用者による修正有り)。

- (5) a. 手段 : V1することによって、V2 (例 : 突き落とす、切り倒す、踏み潰す、...)
- b. 様態 : V1しながらV2 (例 : 流れ着く、転げ落ちる、忍び寄る、...)
- c. 原因 : V1の結果、V2 (例 : 歩き疲れる、抜け落ちる、焼け死ぬ)
- d. 並列 : V1かつV2 (例 : 忌み嫌う、恋い慕う、慣れ親しむ)
- e. 補文関係 : V1という行為 / 出来事を(が)V2 (例 : 見逃す、編み上がる、...)
- f. 副詞的關係 : V2が副詞的にV1の意味を補強 (例 : 晴れ渡る (= すっかり晴れる)、使い果たす (= 全部使う)、居合わせる (= たまたま同じ場所にいる))

しかし、この分類は「打ち消す、押し隠す、...」のようなV1が接辞化したもの(石井2007)⁷⁾や「(話を)切り上げる、(仲を)取り持つ、...」のような「全体で一つの意味を表すもの、つまり、一語化したものとして、辞書に登録し、文法の対象としない」(寺村1984 : 167)ものは収めることができない。そのため、V1とV2の意味関係を整理した網羅的な分類とは言えないが⁸⁾、本稿における「原因」と「手段」の例を選定するには大いに参考になるので、本稿では当該の分類を援用して考察する。なお、韓国語を対象とした研究の中で、V1とV2の意味関係に焦点を当てて分析しているものとしては内山(1997)があり、その他は調べた範囲では見当たらない⁹⁾。このことを踏まえ、以下では基本的に日本語を対象とした研究を基準にして分析を行うことにする。

7) 同氏は「打ち消す、押し隠す、掻き集める、...」のような例を「語彙接頭辞構造」を有するものと規定し、意味的には「派生語」と言えるものであると分析している(Ibid.113)。

8) このことについて、影山(2013 : 7)は「実際に観察されるすべての語彙的複合動詞がこれらの6分類のいずれかに曖昧さなく振り分けることができるかどうかは疑問である」のように述べている。

9) 韓国語を対象とした(5)のような分類がほとんど行われていないことは意外な結果であろう。韓国語学ではある特定の動詞結合が「複合動詞」としての資格を有するかという点については活発に議論されてきたが、V1とV2の意味関係を整理することについては目が向けられていないようである。両言語の動詞結合の総合的な対照分析になるためには、今後、韓国語を対象とした(5)のような分類も必要であると考えられる。

2.3 「原因」の具体例

V1がV2の「原因」を表す例については、以下のような分析がなされている。

- (6) a. 日本語では (中略) 原因 - 結果の関係を複合動詞で表す事が可能である。(中略) V2がすべて意図性を帯びない非対格動詞である。(由本1996 : 107、110)
- b. 後項が状態変化を表し、前項がそれを引き起こす原因となる出来事を表す複合動詞は原因複合動詞と呼ぶことができる。由本(1996)及びMatsumoto(1996)は、これらの複合動詞においては、結果を表す後項動詞が非動作主的でなければならないとしている。(中略) 主語一致の原則は守られている。(松本1998 : 55)
- c. 時間の流れが「 $t_1 \geq t_2$ 」という関係(「手段」か「原因」)の中で、手段と解釈できるのは、主語が意図的な動作主の場合であり、そうでない場合は原因の読みになる。(影山1999 : 196)
- d. V2は非意図的事象を表わす非対格動詞に限られる。それぞれの第一項は、意味役割の違いに関わらず必ず同定される¹⁰⁾。(由本2005 : 130)
- e. 因果関係複合動詞は「死ぬ」「曲がる」などの非動作主的变化動詞をV2に取るのに対し、そのV1は「走る」「遊ぶ」「飲む」などの動作主の動詞でも、「焼ける」「折れる」などの非動作主の動詞でもかまわない。(陳2009 : 84-85)
- f. V1になれるのは、位置変化動詞、状態変化動詞、移動の状態を表す動詞、活動動詞 / 働きかけ動詞であり、V2になれるのは、非意図的な(非直示的)方向性を包入した動詞、位置変化動詞、状態変化動詞である。そして、適切な組み合わせにおけるパターンは「位置変化動詞 + 非意図的な(非直示的)方向性を包入した動詞」「移動の様態を表す動詞 + 位置変化動詞」「位置変化動詞 + 位置変化動詞」「状態変化動詞 + 状態変化動詞」「移動の様態を表す動詞 + 状態変化動詞」「活動動詞 / 働きかけ動詞 + 状態変化動詞」のようなものがある。(何2010 : 163、引用者による表現の一部修正有り)

そして、以下のようなものが各研究における具体例として挙げられている。

10) それぞれの第一項が同定されるとは、V1とV2の動作主が一致するという意味である。

<表1> 先行研究における「原因」の具体例

先行研究	具体例
由本 (1996 : 107)	着膨れる、遊びくたびれる、泣きぬれる、溺れ死ぬ、流れ着く、降り積もる、抜け落ちる、寝静まる、逃げ失せる、飲みつぶれる
松本 (1998 : 55)	降り積もる、おぼれ死ぬ、焼け死ぬ、抜け落ちる、あふれ落ちる、焼け付く、泣きぬれる、泣き沈む、飲みつぶれる、食いつぶれる、働きくたびれる、走りくたびれる、走り疲れる、立ち疲れる、読み疲れる、聞き知る、寝違える
松本 (1998 : 57) ¹¹⁾	打ち上がる、持ち上がる、吸い上がる、吹き上がる、つり下がる、折り曲がる、吹き飛ぶ、積み重なる、覆いかぶさる、突き刺さる、引きちぎれる、張り付く、焼き付く、吸い付く、巻き付く、踏み固まる、焼き上がる、吹き上がる、ちぎり取れる、擦り切れる、擦りむける、突き出る
影山 (1999 : 195)	歩き疲れる、抜け落ちる、おぼれ死ぬ
由本 (2005 : 109)	遊びくたびれる、泣きぬれる、溺れ死ぬ、焼け死ぬ、流れ着く
陳 (2009 : 83)	あふれ出る、溺れ死ぬ、折れ曲がる、崩れ落ちる、死に絶える、染み付く、流れ着く、泣き濡れる、滲み出る、抜け落ちる、飲み潰れる、走り疲れる、降り積もる、待ちくたびれる、焼け落ちる、...
何 (2010 : 147)	あふれ落ちる、溺れ死ぬ、折れ曲がる、崩れ落ちる、焦げ付く、流れ着く、抜け落ちる、焼け落ちる、焼け焦げる、焼け死ぬ、遊びくたびれる、着膨れる、立ち疲れる、泣き濡れる、寝静まる、寝惚ける、飲みつぶれる、走りくたびれる、走り疲れる、働きくたびれる、読み疲れる、...

<表1>から確認できるように、先行研究で分析されているのは「溺れ死ぬ、歩き疲れる」のような介在要素無しタイプであり、「溺れて死ぬ、歩いて疲れる」のような介在要素有りタイプについては取り上げられていない。日本語には前者のような介在要素無しタイプの「複合動詞」が豊富であり、その「数の多さと表現力の多様性」(複合動詞レキシコン)という特徴からそれらに考察対象としての焦点が当てられることが多いと思われる。また、その影響からか、後者のような「動詞句」までを含めての考察にはそれほど関心が向いていないようである。しかし、後者の「溺れて死ぬ、歩いて疲れる」のような例もV1がV2の「原因」を表すものと分析することができ、「動詞結合」を対象とする本稿ではその存在は重視すべきだと考える。ちなみに、韓国語の「原因」動詞結合はすべて{-아/-어/-여}が介在するものであり、{-고}と{-아다/-어다}が介在するもののの中に該当例はない。これは後者の介在要素には

11) 同氏は、これらの例について「打ち上げる、持ち上げる、吸い上げる、...」のような他動詞からの自動詞化によって生じたものとして、前項の目的語に当たる項と後項の主語に当たる項が同一である「主語不一致型の原因複合動詞」と分析している。

V1をV2の「原因」と解釈できる意味・機能がないからである。

3. 考察対象と内容

3.1 考察対象

本稿では両言語の動詞結合を分析するため、「凍え死ぬ、*얼죽다」のような介在要素無しタイプの他に「凍えて死ぬ、얼어 죽다」のような介在要素有りタイプの例も考察対象となる。さらに「原因」の例と関連するものとして「手段」の例も念頭に入れて考察するので、結果的に(5)における「原因」と「手段」のそれぞれの具体例よりその範囲は拡大されている。

さて、本稿では松本(1998)、影山(1999)などの先行研究を参考にして、以下の条件を満たすものを「原因」動詞結合と見なす¹²⁾。

- (7) a. 「V1の結果、V2」のようにパラフレーズできる。
- b. V2は非意図的事象を表す動詞に限定される。
- c. V1とV2の主語は一致する。

そして、1節の「原因」の例とそれらに関連する「手段」の例を用いて、本稿の考察対象を整理すると、<表2>のように示すことができる。以下、理解を助けるために介在要素に囲み線をつけることがある。

<表2> 本稿の考察対象

	介在要素無しタイプ		介在要素有りタイプ	
	原因	手段	原因	手段
日本語	凍え死ぬ *落ち死ぬ	*凍えさせ殺す *落とし殺す	凍え $\square$ 死ぬ 落ち $\square$ 死ぬ	凍えさせ $\square$ 殺す 落とし $\square$ 殺す
韓国語	*얼죽다 *떨어지죽다	*얼리죽이다 *떨어뜨리죽이다	얼 $\square$ 죽다 떨어지 $\square$ 죽다	얼리 $\square$ 죽이다 떨어뜨리 $\square$ 죽이다

12) ちなみに、李(2012 : 309)では「V1とV2共に意図的な動作であり、「V1することによってV2」にパラフレーズできるもの」を「手段」動詞結合と見なしている。

本稿は数多くの動詞結合の中で、「原因」の例をどれだけ正確に抽出するかに焦点を当てているわけではないので、以下の議論では「原因」の典型的な例を中心に分析することにする。なお、用例は、1)影山(1993)などのような先行研究、2)国立国語研究所の「少納言」、3)青空文庫(<https://www.aozora.gr.jp/>)、4)国立国語研究所の「複合動詞レキシコン」より引用したものに、必要により、5)辞書・インターネットで採集したものや作例も用いる。また、本稿で用いる全例文と動詞結合の適格性についてはそれぞれの母語話者のチェックを受けている。

3.2 考察内容

冒頭で述べた疑問を含め、<表2>の「原因」の動詞結合に限定して提起できる問題としては以下のようなものが挙げられる。

- (8) a. 「凍え死ぬ」類と「*落ち死ぬ」類の成立可否
- b. 「*落ち死ぬ」類と「落ちて死ぬ」類の成立可否
- c. 「凍え死ぬ」類と「凍えて死ぬ」類の意味上の違い
- d. 「凍えて死ぬ」類の存在意義
- e. 「얼어 죽다」類の複合動詞としての認定可否¹³⁾
- f. 「*落ち死ぬ」類と「*떨어져 죽다」類の不成立の理由
- g. 「凍え死ぬ・凍えて死ぬ」類と「*얼죽다・얼어 죽다」類の相互の対応関係

(8a-d)は日本語の問題で、(8e)は韓国語の問題である。そして、(8f)と(8g)は対照言語学の観点から提起したものである。また、<表2>の「手段」の例と関連して以下のような問題も提起することができる。

- (9) 「凍え死ぬ *凍えさせ殺す」類・「凍えて死ぬ 凍えさせて殺す」類・「*얼죽다 *얼리죽이다」類・「얼어 죽다 얼려 죽이다」類といった類型化とその意義

以下、本稿の全体的な構成を考慮し、4節では(8a-e)の問題について議論し、5節では対照言語学の観点から(8f)と(8g)の問題を取り上げる。ただし、(8)の問題のうち、李(2012)で検

13) 複合動詞の認定問題については「얼어 죽다」類と「떨어져 죽다」類を区別する必要が特にないので、この問題を取り上げる4.5では「얼어 죽다」類の中に「떨어져 죽다」類も含めて分析する。

討したものに関しては簡単にまとめる程度にとどめておく。なお、(9)の問題については紙面の都合があり、稿を改めて論じることとする。

4. 日韓語の「原因」動詞結合

本節では(8a~e)の問題、すなわち、1)「凍え死ぬ」類と「*落ち死ぬ」類の成立可否、2)「*落ち死ぬ」類と「落ちて死ぬ」類の成立可否、3)「凍え死ぬ」類と「凍えて死ぬ」類の意味上の違い、4)「凍えて死ぬ」類の存在意義、5)「얼어 죽다」類の複合動詞としての認定可否について順に議論する。

4.1 「凍え死ぬ」類と「*落ち死ぬ」類の成立可否

介在要素無しタイプの「凍え死ぬ」は適格な日本語として成立するのに対して、同じタイプの「*落ち死ぬ」はなぜ成立しないのか。以下の例を見てみよう。(10)は「凍え死ぬ」類の具体例であり、(11)は「*落ち死ぬ」類の具体例である。

- (10) a. 凍え死ぬ、焼け死ぬ、おぼれ死ぬ (影山1999 : 206)
 b. 避難地区の虻田(あぶた)町では、噴火口近くの幼稚園の窓ガラスが割れ、屋根が抜け落ちるなどしたという。(何2010 : 145)
 c. 水があふれ落ちる。(何2010 : 149)
- (11) a. *ころび死ぬ、*(崖から)落ち死ぬ、*沈み死ぬ、*転がり死ぬ (影山1999 : 206)
 b. *太郎が崖から落ち死んだ。(何2010 : 149)
 c. *卵が(テーブルから床に)落ち割れた。(何2010 : 149)
 d. *柱が倒れ砕けた。(何2010 : 150)
 e. *あの教会の屋根の十字架が火事で焼け倒れた。(何2010 : 149)

本稿で設けた(7)の条件からすると、(11)の動詞結合は「原因」の例となり得る。しかし、実際には成立しないものとされている。そして、その理由を説明するために、影山(1999)と何(2010)が援用しているのは、Goldberg(1991, 1995)の「一義的経路の制約(Unique Path Constraint)」である。これは要するに「状態変化と位置変化の両方を一つの述語を用いて表現することは

できない」(影山1999 : 206)という制限であり、これに従うと、一つの述語、すなわち「1語」の中には以下のような組み合わせは許容されない。

- (12) a. 位置変化動詞 + 状態変化動詞
b. 状態変化動詞 + 位置変化動詞

(10a)の例は「状態変化動詞 + 状態変化動詞」の組み合わせで、(10b、c)の例は「位置変化動詞 + 位置変化動詞」の組み合わせであるため、当該の制約に違反しない。これに比べ、(11a~d)の例は(12a)に当てはまり、(11e)の例は(12b)に当てはまるため、当該の制約に違反し、不適格となる、と分析されている(影山1999、何2010)。これらの例に限定すれば、一義的経路の制約は分析の基準として有用であると言えよう。以下の例も見てみよう。

- (13) a. *庭のザクロが熟し落ちました。
b. *柵を作ったが、この柵が腐り倒れた。
c. *ほとんどが殴られ死にました。

(13)の例は韓国語との対照も念頭において挙げたものであるが、(13a、b)の「*熟し落ちる」と「*腐り倒れる」は(12b)に当てはまるので、(11e)の例と同様に分析することができる。しかし、(13c)の「*殴られ死ぬ」に対しては(12)の制限が分析の基準として有用ではない。なぜなら、V1「殴られる」が位置変化動詞や状態変化動詞ではなく、働きかけ動詞であるからである。「殴る」と同様に、その受身形である「殴られる」も誰かに殴られたからといって、殴られた対象の位置や状態が変化するとは限らない(位置変化：太郎が崖から{落ちた / *殴られた}、状態変化：太郎がヘトヘトに{疲れた / *殴られた})。結果的に当該の「*殴られ死ぬ」は「働きかけ動詞 + 状態変化動詞」の組み合わせと分析され、一義的経路の制約に違反しないにもかかわらず、適格なものとしては成立しないことになる。このような例の存在は一義的経路の制約の限界、すなわち、すべての例に当てはまるわけではないことを示唆する¹⁴⁾。

それでは、「*殴られ死ぬ」の不成立についてはどのように整理すれば良いのか。後で見るように、同例と密接に関連するものとして「殴られて死ぬ」があり、すると「*殴られ死ぬ

14) 一義的経路の制約に反しているにもかかわらず、実際には容認可能なものとして「焼け落ちる、崩れ落ちる」のようなものがある。これらについては何(2010)の分析を参照されたい。また、陳(2009)においても同制約の問題点が指摘されているので、あわせて参照されたい。

殴られて死ぬ」という関係は「凍え死ぬ 凍えて死ぬ」のような関係とは対照的となる。このような関係は「手段」の例と分析できる「*焼き食べる 焼いて食べる」「押し倒す 押して倒す」のような例からも確認することができる(李2011b)。結果的に「原因」と「手段」の例においては、それぞれ介在要素有りタイプしか存在しない類型と、介在要素無しタイプと介在要素有りタイプが両方とも存在する類型に二分することが可能となる。問題は、原因の「*殴られ死ぬ」と手段の「*焼き食べる」のような介在要素無しタイプの例が成立しない理由であるが、それについては先行研究においても議論されておらず、現在の段階では明確な説明が難しい。「*焼き食べる、*齧り食べる」などの例に対し、李(2011b)では影山(1993: 9)の「あられ降り、槍降り」のような例と同様に「可能な語」として処理する見解を示しているが、なぜ「*殴られ死ぬ、*焼き食べる、*齧り食べる」のような例が成立しないのかについては今後の課題として残すしかない。

4.2 「*落ち死ぬ」類と「落ちて死ぬ」類の成立可否

(11)と(13)の例文を通して、日本語には「*落ち死ぬ、*落ち割れる、*倒れ砕ける、*焼け倒れる、*熟し落ちる、*腐り倒れる」のような例は容認されないことを確認したが、これらと形態的に類似するものとして以下のような例がある。介在要素無しタイプである「*落ち死ぬ」類と違って、これらは{-て}のある介在要素有りタイプであり、日本語として問題なく成立すると判断される。

- (14) a. 達也が死んだ。枯葉のように、屋上からひらひら落ちて死んだ。(鍵)
 b. 皿がタイルに落ちて割れた。(醜聞)
 c. 爆風で家の玄関のガラス戸が倒れて砕けた。(でんでんむし)
 d. 石造りの家々が崩れ落ち、街路樹は焼けて倒れた。(暴虐)
 e. 八月に、栃の実が熟して落ちるのを拾って、煮て乾燥させます。(北越雪譜)
 f. この柵が腐って倒れたので、新しくすることにしました。(生田緑地)

影山(1993、1999、2013)や窪園(1995)などの分析を参考にと15)、(14)の例は境界部が

15) 影山(1993: 14)は「日本語の屈折は、動詞なら「食べる、食べた、食べて、食べれば」等、形容詞なら「美しい、美しく」等の時制や接続形の語尾を指す。これらの形式は、そこで「語」という単位を閉じ、それ以上に何かが付くと句の領域に移る、という特徴を持つ」と指摘しており、また、影山(2013: 9-10)は「(引用者注: 「歩き疲れる」なら「歩いて、疲れる」のように)V1をテ形動詞で言い換えると、形

分離できることなど、1語としての認定が難しく、V1とV2が{-て}を挟んで統語的に連続しているだけの2語扱いの動詞句と考えられる。「句」というものは「*コップが地面に割れて落ちた」のように意味の上で矛盾が生じない限り、その形成において特別な制限がない。(14)の例は意味上矛盾の見られない結合であり、2語であるため、一つの述語、すなわち、1語を対象とするGoldbergの一義的経路の制約に違反するものにもならない。結果的に意味上矛盾の見られない結合という前提のもとで、介在要素無しタイプ「*落ち死ぬ」類は一義的経路の制約に違反するため、不適格となり、介在要素有りタイプ「落ちて死ぬ」類は、2語扱いの動詞句として同制約に抵触することなく、適格となる、と分析することができる。結局、今の議論では介在要素{-て}が「*落ち死ぬ」類と「落ちて死ぬ」類の成立可否に深く関わることになり、動詞結合における{-て}の存在は非常に重要であると言える。

4.3 「凍え死ぬ」類と「凍えて死ぬ」類の意味上の違い

介在要素無しタイプ「凍え死ぬ」類は、1)同一のV1とV2が用いられる、2){-て}には前件を後件の「原因」と解釈できる意味機能があるという2点により、介在要素有りタイプ「凍えて死ぬ」類への置き換えが可能であると考えられる¹⁶⁾。

- (15) a. マッチ売りの少女は、雪の中で{凍え死んだ / 凍えて死んだ}。
 b. 火事で{焼け死んだ / 焼けて死んだ}。
 c. 今日は{遊び疲れた / 遊んで疲れた}ので、早く寝よう。
 d. 大粒の涙が{あふれ落ちた / あふれて落ちた}。
 e. {酔い潰れた / 酔って潰れた}人を介抱する。

当該の置き換え関係については長嶋(1976)、森田(1990)、姫野(1999)、影山(2013)などにおいても確認できるが、それでは両者における意味上の違いは何か。この疑問に対して参考になるものとして、ここでは石井(1987)と岡部(2015)の分析を取り上げる。

石井(1987: 59)は、「(品物を)取り返す-(品物を)取って返す / 強引に押し倒す→?強引に押して倒す」のような例を挙げ、「取り返す」と「取って返す」とは意味的に別な動きを表している。(中略) 複合動詞「押し倒す」は、たしかに継起性という点においては「押して倒す」

態的にはもはや複合動詞ではなくなる」と指摘している。

16) 当然のごとく、{-ながら、-つつ}などには「原因」と分析できる意味機能がないため、「凍え死ぬ→凍えながら死ぬ」「凍え死ぬ→凍えつつ死ぬ」のような置き換えはできない。

と同じであるといえる。しかし、「押し倒す」においては、「押し(て)」と「倒す」は一連のものではあっても、別個の動きとして表現されているのに対して、「押し倒す」においては、両者は切りはなしがたく結びつき、ひとまとまりのものとして表現されているといえるだろう」と指摘している。

一方、当該の疑問について岡部(2015: 5)は以下の例を挙げ、「例文(16b)は、例文(16a)と表現上は{-て}の有無という点でのみ異なっているが、例文(16a)と全く同じ解釈、すなわち「ぞうがくまを押し、くまが倒れる」という解釈を持つだけでなく、ぞうがくまを押したことで他のものが倒れる、という別の解釈も許す曖昧文である。一方、例文(16a)にはそのような曖昧性はない」(例文番号などに引用者による修正有り)のように述べている。

- (16) a. ぞうがくまを押し倒した。
b. ぞうがくまを押し倒した。

石井(1987)と岡部(2015)の分析を参考にすると、「押し倒す」と「押し倒す」の間には、継起性という点においては共通するものの、表現の仕方、すなわち、ひとまとまりのものとして表現するか、それとも、別個の動きとして表現するかという違いがあり、これによって、後者はV2を置き換えることで前者としては容認されない文が作り出せる、と整理することができよう。(17)はその一例で、たとえば、象が熊を押して、その結果として象が転んだという出来事は、(17a)のように言えないが、(17b)のように言える。

- (17) a. *ぞうがくまを押し転んだ。
b. ぞうがくまを押し倒した。(Isobe・Okabe・Kido2018: 9)

ちなみに「*押し転ぶ」は「他動詞 + 非対格自動詞」の組み合わせとして「他動性調和の原則」に違反しており(影山1993、1999)、(16)と(17)の文の成立可否について、Isobe他(2018: 4)は以下のように整理している¹⁷⁾。

- (18) Kageyama(2013, 2016a, 2016b) has argued that there are two subtypes for the lexical V-V compounds, one of which is called lexical thematic compounds and can be paraphrased as V-te V. The lexical thematic compound and the V-te V sequence are, however, not always synonymous

17) なお、Isobe他(2018: 17)では「押し倒す」と「押し倒す」のアクセントの違いについても指摘されているので、あわせて参照されたい(「oSITA Osita」vs「oSI-TE taOsita」: 大文字はピッチがの高いことを示す)。

with each other: One difference is that the two verbs of a lexical compound must have the same type of argument structure, whereas the V-te V sequence does not have to.

以上の分析を総合して整理すると、「凍え死ぬ」類と「凍えて死ぬ」類については、1)介在要素無しタイプの前者は「複合動詞」であり、介在要素有りタイプの後者は「動詞句」である、2)前者はひとまとまりのものとして表す言い方で、後者は別個の動きとして表す言い方である、3)基本的に「凍え死ぬ」類は「凍えて死ぬ」類に置き換えられる、4)両者は必ずしも同義であるとは限らない。基本的には同じ意味を表すと言えるが、後者の場合は文脈次第で前者とは違う解釈もあり得る、5)前者は同じ項構造を持つ必要があるのに対して、後者にはそのような必要性はない、のようにまとめることができる。なお、介在要素無しタイプと介在要素有りタイプが両方とも実在する場合、日本語でより優先的に用いられるのは前者であることを最後に付け加えておきたい。

<表3>「少納言」からの検索結果

種類	介在要素無しタイプ		介在要素有りタイプ	
	検索文字	検索結果	検索文字	検索結果
「原因」動詞結合	凍え死ぬ	4件	凍えて死ぬ	1件
	凍え死んだ	3件	凍えて死んだ	0件
	焼け死ぬ	14件	焼けて死ぬ	0件
	焼け死んだ	13件	焼けて死んだ	0件
	歩き疲れる	1件	歩いて疲れる	0件
	歩き疲れた	10件	歩いて疲れた	2件
	酔いつぶれる	19件	酔ってつぶれる	0件
	酔いつぶれた	9件	酔ってつぶれた	0件
「手段」動詞結合	押し倒す	21件	押して倒す	1件
	押し倒した	24件	押して倒した	0件
	殴り殺す	5件	殴って殺す	0件
	殴り殺した	19件	殴って殺した	0件
	踏み潰す	16件	踏んで潰す	0件
	踏み潰した	5件	踏んで潰した	0件

<表3>は「原因」動詞結合と「手段」動詞結合の幾つかの例を国立国語研究所の「少納言」で検索した結果である¹⁸⁾。検索文字次第では検索結果も異なり得るが、<表3>の結果をみる

と、同一の動詞を用いて作り出せる動詞結合としては、介在要素無しタイプが介在要素有りタイプより相対的に多く用いられていることが確認できる。このような結果は、後で見るように、両言語の動詞結合の対応関係を整理する際に考慮すべきポイントになる、という点で意味を持つ。

4.4 「凍えて死ぬ」類の存在意義

今までの議論を通して分かるように、介在要素有りタイプ「凍えて死ぬ」類は、形態・意味的に類似するものとして介在要素無しタイプ「凍え死ぬ」類を持つものである。この点、類似するものとして介在要素無しタイプ「*落ち死ぬ」類を持たない「落ちて死ぬ」類と対照的である。

「凍えて死ぬ」類の具体例としては、(15)の「凍えて死ぬ、焼けて死ぬ、遊んで疲れる、あふれて落ちる、酔って潰れる」の他に、以下のようなものもある。すべて実例であり、日本語として問題ない動詞結合の一種であると思われる。

- (19) a. とことこと手の届く範囲にやってきてどでーんとひっくり返り「ああ、走って疲れた。なでていいよ。」と目で訴えてきます。(うちの王子)
- b. 被災者は、(中略) 着用していたヘルメットが脱げて落ちた。(伐倒した木)
- c. 程よく焼けて焦げた皮をそっくり剥ぎ、狐色になった中身の雫を切って、花鰹をたっぷりかけるのですが、(後略) (鷗外)

通常、日本語の「複合動詞」に関する研究では、「凍え死ぬ」類のような介在要素無しタイプを対象とすることが多いため、「凍えて死ぬ」類のような介在要素有りタイプに焦点が当てられることはほとんどない。しかし、本稿のように広い視野で日韓両言語の「動詞結合」を対照しようとする研究では「凍えて死ぬ」類の存在を見逃すことができない。と言うのは、それらは同じ介在要素有りタイプであるという点で、韓国語の「얼어 죽다」類と同一条件での対照が可能なものとなるからである。

18) 動詞結合のテ形で検索すると、たとえば「凍え死ぬ」の場合、「凍え死んで」の文字では7件が、「凍えて死んで」の文字では「濡れた体をなんとかしなければ、毒ガスに巻かれ、テロリストの銃弾を浴びる前に凍えて死んでしまいそうだ」(フラッシュ)の1件が検索される。しかし、後者における「凍えて死んでしまう」は「凍えて死ぬ+てしまう」ではなく、「凍える+死んでしまう」であるため、ここでの分析対象にならない。このような問題のため、<表3>では検索文字としてテ形は入れなかった。

- (20) a. 떨어져 죽다 → *落ち死ぬ vs 落ちて死ぬ
 b. 얼어 죽다 → 凍え死ぬ vs 凍えて死ぬ

韓国語の「떨어져 죽다」の場合、日本語の対応形としては「*落ち死ぬ」が容認されないことから「落ちて死ぬ」にしか訳せないが、この際「떨어져 죽다」と「落ちて死ぬ」が両方とも {-어} と {-て} を有する介在要素有りタイプである、という点は重要な確認のポイントになる。そして、このことを踏まえ、介在要素有りタイプ「얼어 죽다」を同じタイプである「凍えて死ぬ」に対応させ、両者の対応関係を整理しようとするのは整合的なアプローチであり、「凍えて死ぬ」類の存在意義はここにあると本稿では考える。なお「얼어 죽다」の最終的な日本語の対応形としては、内山(1997)と同様に「凍え死ぬ」を選定するが、このことについては5.2で取り上げることにする。

4.5 「얼어 죽다」類の複合動詞としての認定可否

ここでは、(8e)の問題、すなわち、「얼어 죽다」類を「複合動詞」として認定することができるか、という点について議論する。

(21)の下線部は「얼어 죽다」類の具体例として、(1b、2c、14b、14e)の動詞結合を自然な韓国語に訳したものである。

- (21) a. 흑한이 원인으로 많은 사람들이 얼어 죽었다. (cf. 凍えて死んだ)
 b. 그 직후에 히모는 육교에서 떨어져 죽었다. (cf. 落ちて死んだ)
 c. 접시가 타일에 떨어져 깨졌다. (cf. 落ちて割れた)
 d. 8월에 칠엽수 열매가 익어 떨어지는 것을 주워, 삶아 건조시킵니다. (cf. 熟して落ちる)

4例共に「V1の語幹+介在要素+V2」と分析できる介在要素有りタイプであり、以下の実例から確認できるように、これらは境界部に{-서}や副詞類の介入を許容する。「얼어 죽다」類に属する他の例についても同じことが言えると考えられるが、このことは当該例に見られる最も大きな形態・統語的な特徴と言える。

- (22) a. 방위군들은 길 위에서 굶어서, 얼어서 죽었다. (인민군)
 b. 마침 하늘로 솟아오르고 있던 황룡이 마저 오르지 못하고 그대로 땅에 떨어져 피를 토하며 죽었다. (영산강)

- c. 내 방에 걸어두었던 거울이 떨어져 와장창 깨졌다. (한샘)
 d. 버찌가 익어 가는 동안 병이 깊었다. (중략) 그 버찌가 익어 땅에 떨어졌다. (버찌가 익어가는 동안)

周知の通り、複合動詞は複合語の下位分類であり、複合語は語の一種なので、複合動詞は語ということになる。そして、語というものは形態的に緊密なまとまりを形成し、その内部に統語的な要素を導入させることができない。「내적 비분리성」(서정수1992)や「語の形態的緊密性」(影山1993)などと呼ばれるこのような性質を踏まえると、(22)のように境界部の分離が比較的自由な例に対しては、1語扱いの複合動詞と認定することが難しくなる。(21)の下線部には意味の特殊化も見られず、また、日本語において介在要素有りタイプ「凍えて死ぬ」類を複合動詞として扱わないこともあわせて考慮すると、(21)のような「얼어 죽다」類は、2語扱いの「動詞句」とみるのが妥当であると考えられる。また、韓国語にはV1がV2の「原因」を表すものとして「*얼죽다, *떨어지죽다, *떨어지깨지다, *익떨어지다」のような介在要素無しタイプの例は存在しないことまで踏まえて、「얼어 죽다」類の以上の特徴を総合して判断すると、韓国語の「原因」動詞結合は、基本的に2語扱いの動詞句として具現される、と考える良いだろう。

5. 対照言語学の観点から見た「原因」動詞結合

本節では(8f~g)の問題、すなわち、1)「*落ち死ぬ」類と「*떨어지죽다」類の不成立の理由と、2)「凍え死ぬ・凍えて死ぬ」類と「*얼죽다・얼어 죽다」類の相互の対応関係、の2点について議論する。

5.1 「*落ち死ぬ」類と「*떨어지죽다」類の不成立の理由

「*落ち死ぬ」類の具体例を確認するために、前述の例を再び挙げる。

- (23) a. *ころび死ぬ, *(崖から)落ち死ぬ, *沈み死ぬ, *転がり死ぬ (影山1999 : 206)
 b. *太郎が崖から落ち死んだ。 (何2010 : 149)
 c. *卵が(テーブルから床に)落ち割れた。 (何2010 : 149)

- d. *柱が倒れ碎けた。(何2010 : 150)
- e. *あの教会の屋根の十字架が火事で焼け倒れた。(何2010 : 149)
- f. *庭のザクロが熟し落ちました。
- g. *柵を作ったが、この柵が腐り倒れた。

そして、(24)は(23)を韓国語に訳したものである。分析の目的上、韓国語の動詞結合も日本語の例と同じように介在要素無しタイプの形に対応させたが、結果的に韓国語においても適格なものとしてまったく認められないことが確認できる。

- (24) a. *넘어지죽다, *(벼랑에서) 떨어지죽다, *가라앉죽다, *쓰러지죽다
- b. *타로가 벼랑에서 떨어지죽었다.
- c. *계란이 (테이블에서 바닥에) 떨어지깨졌다.
- d. *기둥이 쓰러지부서졌다.
- e. *저 교회의 지붕 십자가가 화재로 타넘어졌다.
- f. *뜰에 있는 석류가 익떨어졌습니다.
- g. *울타리를 만들었는데, 이 울타리가 썩쓰러졌다.

では、両言語の当該例が成立しないのは同じ理由であろうか。日本語の「*落ち死ぬ」類が成立しないことについては、4.1で「一義的経路の制約」によって説明可能であることをみたが、韓国語の「*떨어지죽다」類の不成立についてはどのように整理すれば良いのか。この疑問に対して、本稿では韓国語の当該例が成立しないのは、動詞語幹の自立性が深く関わると考える。以下でその背景になる研究を概観する。

李(2011a : 34-35、2011c : 96)は、動詞語幹が「自立的だ」という意味を広く捉えて、「単独で用いることができる場合を含め、ある環境において語幹が素の形で立ち、その構成の全体が一つのまとまった意味を表す」のように定義した後、両言語の動詞語幹を、1)単独で用いる場合、2)合成語の後項要素として用いる場合、3)合成語の前項要素として用いる場合に分けて分析した。そして、その最終的な結論を以下のようにまとめている。

- (25) 日本語の動詞は語幹の自立性が高いのに対して、韓国語の動詞は語幹の自立性が相対的に低い。(李2011c : 112)

この結論を踏まえると、韓国語の動詞語幹は自立性が低いいため、別の動詞を後続させて

「動詞結合」を形成する際には{-아}や{-고}のような他要素の介在を必要とする、と分析することができる。もし、ある概念を説明するために「新しい動詞結合」が誕生するのであれば、それは介在要素有りタイプであることが予想され、(24)の場合も以下のように{-아 / -어}を介在させれば、すべて容認可能なものとなる。

- (26) a. 넘어지어(→넘어져) 죽다, (벼랑에서) 떨어지어(→떨어져) 죽다, 가라앉아 죽다, 쓰러지어(→쓰러져) 죽다
 b. 타로가 벼랑에서 떨어지어(→떨어져) 죽었다.
 c. 계란이 (테이블에서 바닥에) 떨어지어(→떨어져) 깨졌다.
 d. 기둥이 쓰러지어(→쓰러져) 부서졌다.
 e. 저 교회의 지붕 십자가가 화재로 타아(→타) 넘어졌다.
 f. 뜰에 있는 석류가 익어 떨어졌습니다.
 g. 울타리를 만들었는데, 이 울타리가 썩어 쓰러졌다.

すると、韓国語の「*떨어지죽다」類が成立しないのはV1の形態の問題であり、日本語の「*落ち死ぬ」類とはその理由が異なると分析することができる。4.1の結論も含めて、以上のことを本稿では以下のように整理する。

- (27) 日本語の「*落ち死ぬ」類が成立しないのは、位置や状態といったV1とV2の意味特徴が関わるので意味レベルの問題であるのに対して、韓国語の「*떨어지죽다」類が成立しないのは、V1の形態が関わるので形態レベルの問題である。すなわち、日本語の場合は意味的な制限が働くのに対して、韓国語の場合は形態的な制限が働く。

結果的に(27)の整理は李(2012)で取り上げた「*落とし壊す」と「*때리죽이다」の不成立の理由についての考察結果と同様であり、「原因」動詞結合は「手段」動詞結合と密接な関係にあるものとして、基本的に同一観点からの分析が可能な対象と言える。

5.2 「凍え死ぬ・凍えて死ぬ」類と「*얼죽다・얼어 죽다」類の相互の対応関係

この問題の解決を試みるために、本稿では暫定的に(28)のような基準を設け、これに基づいて対応形を設定する¹⁹⁾。なお、この基準は加藤(2007: 114)の「形態と意味の適格性」に

19) 李(2012)では両言語の動詞結合の相互の対応関係を整理するために、日本語が基準になった場合の韓

関する序列性仮説」を参考にして設けたものである。

(28) 代表的対応形選定のための基準

- a. 基本的に同じタイプに対応させる。
- b. 同じタイプが形態的に許容されない場合、V1とV2を生かし、形態・意味的に最も通じるもので代替する。
- c. 形態的に許容され、意味的にも矛盾のない対応形が複数存在する場合、より構造が単純で、日常的に使用度が高いものを選択する。

この基準を適用し、「凍え死ぬ・凍えて死ぬ」と「*얼죽다・얼어 죽다」の相互の対応関係を整理すると、以下ようになる。当然のごとく「*얼죽다」は実在しない形態であるため、存在しない例の日本語訳を考える必要はない。なお「」は最終的な対応形を意味する。

- (29) a. 凍え[㉠]死ぬ 얼[㉡]죽다
 b. 凍え死ぬ → *얼죽다 얼[㉡]죽다
 c. 얼[㉡]죽다 → 凍え[㉠]死ぬ・凍え死ぬ 凍え死ぬ

以下、「原因」動詞結合を中心に「手段」などの他の例も含めて、(28)の各基準に該当する具体例とそれらの特徴を確認する。

まず、(29a)は(28a)に当てはまる例である。他に「殴られ[㉠]死ぬ→맞[㉡]죽다, 떨어지[㉡](→떨어져) 죽다 落ち[㉠]死ぬ, 익[㉡]떨어지다 熟し[㉠]落ちる、...」「볶[㉡]먹다 炒め[㉠]食べる、얻[㉡]마시다 もらっ[㉠]飲む、만들[㉡]팔다 作っ[㉠]売る、...」などのようなものが該当例として挙げられる。これらについては、1)介在要素有りタイプ同士の対応関係が成立し、2)介在要素無しタイプの対応形は容認されない(*얼죽다, *落ち死ぬ, *熟し落ちる、*炒め食べる、*もらい飲む、*作り売る)、という特徴が指摘できる。

次に、(29b)は(28b)に当てはまる例である。他に「あふれ落ちる→*넘치흐르다 넘치[㉡](→넘쳐) 흐르다, 溺れ死ぬ→*빠지죽다 빠지[㉡](→빠져) 죽다、...」「여닫다→*開け閉める 開け閉めする、오가다→*行き来る 行き来する、오르내리다→*上り下りる 上り下りする、...」などのようなものが代表的な該当例として挙げられる。これらは同じタイプ同士の対応関係が成立しない点にその特徴がある。ちなみに「溺れ死ぬ、焼け死ぬ」に対しては

国語訳と韓国語が基準になった場合の日本語訳とに分けて分析しているが、本稿ではそのように分ける必要はないという考えから(28)の基準を設けている。

「익사하다, 소사하다」に、「여닫다, 오가다」に対しては「開閉する、往来する」に対応させることもあり得るが、「익사하다, 開閉する」のような例は(28b)の「V1とV2を生かし」という基準によって代表的対応形から除外される。

最後に、(29c)は(28c)に当てはまる例である。「얼어 죽다」の場合、その対応形としては、まず(28a)の基準によって同じタイプの「凍え[て]死ぬ」が挙げられる。また「凍え[て]死ぬ」と形態・意味的に類似するものとして「凍え死ぬ」が実在するため、これも「얼어 죽다」の対応形になり得る。結果的に「얼어 죽다」の日本語訳は複数存在することになる。この場合、より構造が単純なのは介在要素のない「凍え死ぬ」であり、また、<表3>の調査結果に従えば、日常的に使用度の高いものは「凍え死ぬ」と判断されるため、本稿では当該語を「얼어 죽다」の最終的な日本語訳と考える。他に「빠지어 (→빠져) 죽다→溺れ[て]死ぬ・溺れ死ぬ 溺れ死ぬ、…」や「手段」動詞結合の「때리어 (→때려) 죽이다→殴っ[て]殺す・殴り殺す 殴り殺す, 밟아 으깨다→踏ん[で]潰す・踏み潰す 踏み潰す、…」のようなものも同様に分析可能なものとして挙げられる。なお、「얼어 죽다, 빠져 죽다」の日本語訳としては、それぞれ「凍死する、凍え死にする」「溺死する、溺れ死にする」のようなものも考えられるが、これらは「名詞+動詞」構造を有する本稿の考察範囲を超えるものである。

6. まとめと今後の課題

本稿は、V1がV2の「原因」を表す日韓両言語の動詞結合を対象にして、1)「凍え死ぬ」類と「*落ち死ぬ」類の成立可否、2)「*落ち死ぬ」類と「落ちて死ぬ」類の成立可否、3)「凍え死ぬ」類と「凍えて死ぬ」類の意味上の違い、4)「凍えて死ぬ」類の存在意義、5)「얼어 죽다」類の複合動詞としての認定可否、6)「*落ち死ぬ」類と「*떨어지죽다」類の不成立の理由、7)「凍え死ぬ・凍えて死ぬ」類と「*얼죽다・얼어 죽다」類の相互の対応関係について考察したものである。その主な結果は以下の通りである。

第一に、「落ちて死ぬ」類と「얼어 죽다」類は2語扱いの動詞句と見るのが妥当であり、韓国語の「原因」動詞結合は基本的に動詞句として具現される。

第二に、日本語の「*落ち死ぬ」類が成立しないのは、位置や状態といったV1とV2の意味特徴が関わるので意味レベルの問題であるのに対して、韓国語の「*떨어지죽다」類が成立しないのは、V1の形態が関わるので形態レベルの問題である。すなわち、日本語の場合は意

味的な制限が働くのに対して、韓国語の場合は形態的な制限が働く。

第三に、両言語の動詞結合における相互の対応関係は、1)基本的に同じタイプに対応させる、2)同じタイプが形態的に許容されない場合、V1とV2を生かし、形態・意味的に最も通じるもので代替する、3)形態的に許容され、意味的にも矛盾のない対応形が複数存在する場合、より構造が単純で、日常的に使用度が高いものを選択する、といった「代表的対応形選定のための基準」によって整理することができる。

今後の課題としては、1)「凍え死ぬ *凍えさせ殺す」類・「凍えて死ぬ 凍えさせて殺す」類・「*얼죽다 *얼리죽이다」類・「얼어 죽다 얼려 죽이다」類といった類型化とその意義についての分析、2)本稿で設けた「代表的対応形選定のための基準」の精密化の2点がまず挙げられる。前者の場合は、紙面の都合上まったく取り上げることができなかつたため、後者の場合は「凍死する、凍え死にする」「溺死する、溺れ死にする」のような「名詞+動詞」構造の例も含められるように、より精密な修正が必要であるため、今後の重要な課題と考える。そして、本稿で解決することができなかつた「*殴られ死ぬ、*焼き食べる、*齧り食べる」のような例が成立しない理由を究明することも欠かせない課題となる。

【参考文献】

- 金永錫・李相億(2006)『現代形態論』학연사, pp.122-123
 金鎰炳(2000)『국어 합성어 연구』도서출판 역락, pp.29-139
 金倉燮(1981)「現代國語의 複合動詞 研究」『國語研究』47, 國語研究会, pp.1-98
 서정수(1992)「합성어에 관한 문제」『국어 문법의 연구』한국문화사, pp.59-94
 이익섭・채완(2001)『국어문법론강의』학研社, pp.69-71
 정원수(1992)『국어의 단어 형성론』한신문화사, pp.54-56
 한길(2006)『현대 우리말의 형태론』도서출판 역락, p.198
 石井正彦(1987)「複合動詞の成立条件」『ケーススタディ日本文法』おうふう, pp.56-61
 _____(2007)『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房, p.113
 李忠奎(2009)「形態レベルからみた日韓語の動詞結合 - 「連用形」「語基」「語幹」を適用した形態構造分析 - 」『日本語文学』43, 韓国日本語文学会, pp.89-117
 _____(2010)「日韓語の動詞結合の形成過程と分類 - 「日韓語の動詞結合形成モデル」の構築を通して - 」『日本文化学報』47, 韓国日本文化学会, pp.83-100
 _____(2011a)「日本語の動詞語幹について - 「語幹の自立性」という観点から - 」『日本語文学』48, 韓国日本語文学会, pp.31-53
 _____(2011b)「日韓語の動詞結合形成モデルの活用 - 「食べる」と「먹다」の例を通して - 」『日本文化学報』50, 韓国日本文化学会, pp.41-59
 _____(2011c)「韓国語の動詞語幹の自立性について - 日本語の動詞語幹の自立性との対照も兼ねて - 」『日本語文学』50, 韓国日本語文学会, pp.93-113

- _____(2012)「日本語の「手段」動詞結合について - 韓国語の「手段」動詞結合との対照も兼ねて -」『日本言語文化』22、韓国日本言語文化学会、pp.305-327
- _____(2021)「動詞結合の日韓対照研究における諸問題 - 主要用語を中心に -」『日語日文学』90、大韓日語日文学会、pp.181-197
- 内山政春(1997)「現代朝鮮語における合成用言について - <用言第 語基 + 用言>の分析 -」『朝鮮学報』165、朝鮮学会、pp.39-114
- 岡部玲子(2015)「言語獲得と言語使用 - 日本語動詞に関する心理言語学実験 -」研究成果報告書、pp.1-5 (<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-24720192/24720192seika.pdf>)
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房、pp.9-14
- _____(1999)『形態論と意味』くろしお出版、pp.187-218
- _____(2013)「語彙的複合動詞の新体系 - その理論的・応用的意味合い -」『複合動詞研究の最先端 - 謎の解明に向けて』ひつじ書房、pp.3-46
- 何志明(2010)『現代日本語における複合動詞の組み合わせ - 日本語教育の観点から -』笠間書院、pp.145-165
- 加藤重広(2007)「日本語の述部構造と境界性」『北海道大学文学研究科紀要』122、北海道大学文学研究科、pp.97-155
- 窪園晴夫(1995)『語形成と音韻構造』くろしお出版、p.52
- 崔玉花(2019)「中国語の非能格動詞に基づく結果構文と自他交替」『言語学論叢 オンライン版』12、筑波大学一般・応用言語学研究室、pp.1-18
- 陳劭暉(2009)「結果複合動詞の語形成の意味条件と生産性」『言語科学論集』13、東北大学大学院文学研究科、pp.83-94
- 塚本秀樹(2004)「文法体系における動詞連用形の位置づけ - 日本語と韓国語の対照研究 -」佐藤慈・堀江薫・中村渉編『対照言語学の新展開』ひつじ書房、pp.297-317
- _____(2009)「日本語と朝鮮語における複合動詞再考 - 対照言語学からのアプローチ -」『油谷幸利先生還暦記念論文集 朝鮮半島のことばと社会』明石書店、pp.313-341
- _____(2013)「日本語と朝鮮語における複合動詞としての成立・不成立とその様相 - 新影山説に基づく考察 -」影山太郎(編)『複合動詞研究の最先端 - 謎の解明に向けて -』ひつじ書房、pp.301-329
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 第 巻』くろしお出版、p.167
- 長嶋善郎(1976)「複合動詞の構造」鈴木孝夫編『日本語講座第4巻：日本語の語彙と表現』大修館書店、pp.63-104
- 野村雅昭・石井正彦(1987)『複合動詞資料集』国立国語研究所報告書
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房、p.20
- 松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114、日本言語学会、pp.37-83
- 森田良行(1990)「複合動詞について」『日本語学と日本語教育』凡人社、pp.278-295
- 由本陽子(1996)「語形成と語彙概念構造 - 日本語の「動詞 + 動詞」の複合語形成について -」『言語と文化の諸相』英宝社、pp.105-118
- _____(2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房、pp.99-160
- 横山昌子(2016)「現代中国語の使役構文の意味研究」博士学位論文、『神奈川大学大学院 言語と文化論集』特別号、神奈川大学大学院外国語学研究科、pp.1-249
- 和田学(2011)「二つの語彙的緊密性 - 韓国語(と日本語)の複合動詞 -」『山口大学文学会誌』61、山口大学文学會、pp.83-104
- Adele E Goldberg(1991) *It Can't Go Down the Chimney Up: Paths and the English Resultative*. BLS17, pp.368-378
- _____(1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Universtiy

of Chicago Press

Miwa Isobe, Reiko Okabe & Yasuhito Kido(2018) *Lexical V-V compounds in child Japanese: An experimental study*. Journal of Japanese Linguistics, 34(1), pp.3-21

Yo Matsumoto(1996) *Complex Predicates in Japanese: A Syntactic and Semantic Study of the Notion 'Word'*. CSLI and Kurocio, pp.197-236

[少納言・青空文庫](下線は本文で用いた略語)

伊岡瞬(2005)『いづつか、虹の向こうへ』角川書店

小金井喜美子(1956)『鴉外の思い出』八木書店

鈴木牧之(著)・田村賢一(訳)(2004)『北越雪譜物語』新潟日報事業社

東野圭吾(2004)『鍵』文芸春秋

樋口京輔(1999)『フラッシュ・オーバー』角川書店

リン ブロック(著)・田中孜(訳)(2005)『醜聞の館』論創社

[インターネット](下線は本文で用いた略語)

「영산강 발원지를 찾아서... 담양 가마골」(<https://blog.naver.com/lds2032/221382333669>)

「이잠의 버찌가 익어가는 동안 감상 / 황학주」(<https://blog.naver.com/uree7766/221450396533>)

「인민군에게 잡힌 DJ, 어떻게 살아남았나?」(<https://www.pressian.com/pages/articles/66802#0DKU>)

「한샘 루미에 LED 거울」(<https://blog.naver.com/trjp2/221838927498>)

「生田緑地の谷戸の自然保全活動」(<http://konrac2.sakura.ne.jp/work111021.html>)

「うちの王子は天才うさぎ」(<https://mapleprince.blog.fc2.com/category6-5.html>)

「でんでんむしの岬めぐり」(<https://dendenmushimushi.blog.ss-blog.jp/2012-08-02-3>)

「暴虐が待つ場所」(https://tw6.jp/scenario/show?scenario_id=10378)

「伐倒した木にはね飛ばされた雑木が激突」(https://anzeninfo.mhlw.go.jp/anzen_pg/sai_det.aspx?joho_no=257)

「複合動詞レキシコン」(<https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/>)

논문투고일	: 2021년 06월 18일
심사개시일	: 2021년 07월 14일
1차 수정일	: 2021년 08월 02일
2차 수정일	: 2021년 08월 12일
게재확정일	: 2021년 08월 20일

 <要旨>

「原因」動詞結合に関する日韓対照研究

李忠奎

本稿は、前項動詞が後項動詞の「原因」を表す両言語の動詞結合を考察したものである。具体的には、「凍え死ぬ・凍えて死ぬ・落ちて死ぬ・얼어 죽다・떨어져 죽다」のような実例に、「*落ち死ぬ・*얼죽다・*떨어지죽다」のような容認されない例も含めて、それらにおける成立可否・意味上の違い・複合動詞としての認定可能性などの諸問題について分析を行った。また「代表的対応形選定のための基準」を設け、両言語の動詞結合における相互の対応関係の整理を試みた。同基準に従うと、「凍えて死ぬ・凍え死ぬ⇒얼어 죽다」「얼어 죽다⇒凍え死ぬ」のような形に対応形の整理が可能となる。

本稿は、先行研究ではほとんど取り上げることのなかった「凍えて死ぬ・落ちて死ぬ」のような介在要素有りタイプの例に、「*落ち死ぬ・*얼죽다・*떨어지죽다」のような容認されない介在要素無しタイプの例も含めて、より広範囲な視点から考察を行ったところに意義がある。また、まだ暫定的なものではあるものの、代表的対応形選定のための基準は、今後、両言語間の対応関係をより精密に整理するための有効な基準としてその活用が期待される。

A Contrastive Study on V1-cause V2-result Combinations in Japanese and Korean

Lee, Chung-Kyu

This study aims to examine verb combinations when the first verb (V1) indicates the cause of the second verb (V2) in both Japanese and Korean. To be more specific, it focuses on actual examples such as kogoe-sinu, kogoe-te sinu, ochi-te sinu, el-e cwuk-ta and tteleci-e cwu-ta and the unacceptable compound verbs including *ochi-sinu, *elcwuk-ta, *tteleci-cwuk-ta. This study analyzed their combining validity, semantic differences and possibility as compound verbs.

This study also determined criteria to select representative form and clarified the corresponding relationships between Japanese and Korean in verb combinations. According to the criteria, both kogoe-te sinu and kogoe-sinu correspond to Korean el-e cwuk-ta, and Korean el-e cwuk-ta corresponds to Japanese kogoe-sinu, respectively.

The significance of this study is that it analyzed V1-te V2 combinations (e.g. kogoe-te sinu, ochi-te sinu) which have rarely been discussed in previous studies, and the non-existing verbs (e.g. *ochi-sinu, *elcwuk-ta, *tteleci-cwuk-ta). Furthermore, the criteria this study suggested (albeit tentative) is expected to provide useful information to elaborate the corresponding relationships between the two languages.